

「教育の質の向上」の視点からの体育系大学における 英語教育の新しい試み (第二報)

朴澤 泰治¹⁾ 山口 貴久¹⁾ 高橋 仁¹⁾ 菊地 博¹⁾
鎌田 幸雄¹⁾ M.キーナート¹⁾ J.パラング¹⁾ M.マンキン¹⁾
石田 照規¹⁾ 伊東 宏之¹⁾

1) 仙台大学体育学部

学会等報告

「教育の質の向上」の視点からの体育系大学における 英語教育の新しい試み (第二報)

朴澤 泰治¹⁾ 山口 貴久¹⁾ 高橋 仁¹⁾ 菊地 博¹⁾ 鎌田 幸雄¹⁾
M. キーナート¹⁾ J. パランギ¹⁾ M. マンキン¹⁾ 石田 照規¹⁾ 伊東 宏之¹⁾

1) 仙台大学体育学部

Taiji Hozawa¹⁾, Takahisa Yamaguchi¹⁾, Hitoshi Takahashi¹⁾, Hiroshi Kikuchi¹⁾, Yukio Kamata¹⁾, Marty Kuehnert¹⁾, Jerry Parangi¹⁾, Michael Mankin¹⁾, Teruki Ishida¹⁾, Hiroyuki Ito¹⁾: A New Attempt to the English Education Method at the Faculty of Physical Education in the case of Sendai University: Improving the Quality Assurance Framework of Higher Education (second report): Bulletin of Sendai University, 51 (1): 45-62, September, 2019.

1) Sendai University Faculty of Sports Science

KEYWORD Education by proficiency level, Sports rules written in English, The quality assurance framework of Higher Education, Merits of study English in sports

キーワード 習熟度別教育, 英語とスポーツルール, 教育の質保証, 「スポーツに、何故、英語が必要か」

はじめに

仙台大学紀要 Vol.50 朴澤ほか (2019) に、第一報として、教育の質の向上の視点からの体育系大学における「英語教育の新しい試み」について、仙台大学の取組みを報告・紹介した。

そして、その導入の背景と趣旨を、以下のように整理した。「競技スポーツのルールには英語が多い。従って、競技スポーツ選手あるいはスポーツを様々な支える人材にとって、英語は必須の外国語である。」「グローバル社会が喧伝されるなか、英語に馴染みやすいスポーツというものを専攻領域とする大学としては、他の領域にもまして、より意義のある英語教育を展開していく使命を持つといっても過言ではない。本稿で示す取組みは、体育系大学としての英語授業に教育方法の工夫・改善方策を導入することにより、大学教育改革で求められている『教育の質の向上』を踏まえた実効性ある英

語教育の定着を目指すという視点から取組んでいるものである。」「中教審答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』の具現化と併せ、PDCAサイクルによる具体的数値目標を伴った改革が大学教育においても要請される場所となっており、本取組みは、これらの背景動向と一体的な先進的試みとして位置付けることができる。」

2017年度から開始した新しい教育体系では、必修科目として、「総合英語A」から「総合英語D」まで、1コマ45分、1科目1単位、計4科目4単位を設定し、1年次後期から3年次前期まで2年間に渡り配当するとともに、入学時の英語力確認テスト(プレイスメント・テスト<PT>)結果に基づき習熟度別にクラスを少人数で編成、レベルを5段階に分け、レベル毎に難易度を変えた授業を展開することとした。

A・B・C・D各科目の履修時期は次のとおりとし、「総合英語A」から「総合英語D」に進む

にしたがって、5段階の学習レベルが一段階ずつ上昇していく体系とした。

科目	履修時期	授業内容
総合英語A	1年後期	レベル1～レベル5
総合英語B	2年前期	レベル2～レベル6
総合英語C	2年後期	レベル3～レベル7
総合英語D	3年前期	レベル4～レベル8

選択科目については、1コマ90分、各2単位科目として、1年次後期に「スポーツに、何故、英語が必要か」、3年次後期に「就職のための英語」（人数限定）等を設置し、スポーツ科学という専攻領域における英語習熟の必要性、また、卒業後の英語の関わりなどを知覚させることとし、さらに、1年次必修科目である「導入演習」、「体育系大学の基礎教養」において、英語教育への新しい試みの導入に資する事項を授業内容に組み込み、新しい英語教育についての理解を深めることとした。

このうち、「スポーツに、何故、英語が必要か」は、米国大学卒業者および英語圏諸外国勤務経験保有者から、アスレチック・トレーナーその他スポーツ関連資格取得を含む各々の英語圏留学等の滞在経験について、担当授業で、それぞれ1～2コマ程度披瀝してもらい、スポーツ分野における英語の必要性について認識を深めさせる科目として、1年次後期の「総合英語A」履修と同時に開講し、必修英語の学修への意欲促進を図る体系とした。

「総合英語」（必修）と「スポーツに英語はなぜ必要か」（選択）の開講状況

◎は開講済み △は履修登録済み			総合英語(必修)				スポーツ に英語
			A	B	C	D	
2017年度 (平成29) 入学	1年次	前期					◎
		後期	◎				
	2年次	前期		◎			
		後期			◎		
	3年次	前期				◎	
		後期					
2018年度 (平成30) 入学	1年次	前期					
		後期	◎				
	2年次	前期		◎			
		後期			△		
2019年度 入学	1年次	前期					
		後期	△				

(◎は履修済み、△は履修予定)

第二報報告の意図

この取組みは、2017年度入学生から開始しており、第二報の報告は、第1期生について、丁度、「総合英語A」から「総合英語D」までの

必修科目4単位の履修が終了した時点に当たっている。PDCAの観点からは、取入れた教育方法等に係る検証・評価に際して、様々な角度から分析を行い、さらなる質の向上に資する作業を実施すべき時期に差し掛かっていることになるが、

時系列的比較の視点では、第2期生については、必修科目の「総合英語C」および「総合英語D」の履修終了を待たなければならない。

そこで本時点における第二報としては、体育系大学たる仙台大学への新英語教育導入の最大眼目が『スポーツにおける英語の必要性』にあるところから、選択科目「スポーツに、何故、英語が必要か」（以下、「スポーツと英語」と記載する。）に焦点を当て、当該科目の履修が必修英語の履修との関係でどのような機能を発揮したかについて、履修に関する諸データをもとに整理・考察を行うことを以って、報告とする。報告事項としては、対象学生を、第1期生である2017年度入学生および第2期生である2018年度入学生とし、対象科目を、共に履修機会を得た「スポーツと英語」を共通軸として、第1期生については「総合英語A」から「総合英語D」まで

の4科目、第2期生については「総合英語A」および「総合英語B」の2科目とした。また、時系列的分析についても2学年が比較できる「総合英語A」および「総合英語B」を対象科目とした。なお、データ整理に際しては、「スポーツと英語」の履修者群を基礎的な対象としているが、当該科目の履修履歴はあっても、「総合英語」各科目のいずれかで退学その他によるデータ欠落が生じている場合には、分析データから除外した。従って、第1報に整理したITを活用した教育方法管理として活用している学籍管理上の「スポーツと英語」受講者数とは分析対象数は異なっている。

ちなみに、学籍管理上の「スポーツと英語」受講者状況は、次の通りであり、第2期生の履修は第1期生に比べ著増した。なお第3期生は300名を超える履修登録者数となっている。

	体 育	健康福祉	運動栄養	スポーツ情報 マスメディア	現代武道	合 計	(再計) 体育以外
2017 年度	134	8	0	11	11	164	30
2018 年度	226	13	7	15	17	278	52

(2017年度運動栄養学科は同授業時間帯に学科必修科目開講のため履修者なし・子ども運動教育学科は完成年度まで旧英語教育体系のため対象外である)

1. 履修学生のレポートから

「スポーツと英語」については、各年度、履修終了時に学生にレポート作成を課しており、成績評価対象ではあるが、これからも、新しい英語教育の教育効果を端的に推測することが可能となる。まずは、レポートに表れた履修学生の「声」を確認する。2年間で、350を越えるレポート収集となっているため、次の選択基準により、その代表的な「声」を整理した（類似の感想内容は除く）。

- ・年度別に2区分
- ・体育学科所属履修者と体育学科以外の学科所属履修者の2区分

- ・各区分別に、英語力確認テスト（プレイスメント・テスト）の得点が最上位グループ層と最下位グループ層にそれぞれ属する履修者群の2区分

① 2017年度 体育学科 英語力確認テスト最上位得点層から

○私は、小学4年生の頃からずっと陸上競技を続けてきたのだが、大学へ入学してから競技者としてではなく補助員として大会の運営の方に携わる機会が増えた。運営をして行く上で英語がたくさん使われていることに改めて気づいた。トラック競技のスタート時の合図である「on your marks」はもちろん、

選手が棄権した時にリザルトに表示される「DNS[Did Not Start]」や選手が失格となった時の「DQ[Disqualified]」などが例として挙げられる。陸上競技の種目のひとつである「3000メートル障害」は大会のプログラム等では「3000mSC」と表示されているのだが、この「SC」が「steeplechase」の略であることはつい最近まで知らなかったし、その英語がどういう意味なのかは、なおさらわからなかった。これらの英語は日本の大会でも普通に使われている。トラック競技のスタートの合図が「位置について」から「on your marks」に変わったのはつい最近である。このように陸上競技では英語がたくさん使われるようになってきており、陸上競技に携わる限り、最低でも陸上競技で使われる英語は理解し覚える必要があると考える。そうすることで、陸上競技をより楽しんだり、スムーズに運営を行うことができる。私は高校生の頃から英語が好きで海外の文化や暮らしに興味を持っていた。「スポーツと英語」という授業では、自分の好きな英語とスポーツの関係を学ぶ上で実際に海外にいた経験のある先生方の話を聞いて非常に面白い授業だった。中でも、日本より海外の方がスポーツ科学が進んでいるし論文がたくさんあるので、英語がわかると情報を得る手段が増えるという内容が一番印象に残っていて、それがきっかけで英語をもっと学びたいと思うようになった。自分の記録を伸ばしたいと思った時に、今まではインターネットを用いて日本語で検索をして情報を得ていた。しかし、この授業で、英語で検索した方がヒット数をはるかに多いということを知り、実際に英語で調べてみた。そうすると確かに日本語で調べた時よりも多くの情報が出てきた。また、YouTubeでも英語で調べると情報源の幅がかなり広がる。しかし、今の英語力では全てを理解することは不可能である。そこで私はさらに英語を学びたいという気持ちが強まった。英語力を身につけるために、まずは、高校時代のように毎日単語帳に目を通すようにしたい。また、この授業内で勧められた海外の映画を字幕版

で観るということも取り入れていきたい。さらに、この授業を通して留学や海外旅行というものにも興味を持つようになった。もし機会があれば是非行ってみたい。この授業を通して、英語が持つ可能性を知ることができ学ぶ意欲が湧いたので非常に有意義な時間を過ごせた。

○この授業を受講したことで、スポーツと英語の関係性についての考えが大きく変わりました。今までは、スポーツに英語が必要となる人は、海外を拠点に活動しているプロのアスリートだけだと考えていました。しかし、国際大会に参加する場合に英語を、選手自身、あるいはコーチらが話せると、審判団に抗議できたり、自分たちのチームに勝利を呼び寄せるツールになります。そのため、英語を自分の一つの武器として持っているだけで、アスリートのみならず、スポーツ関連の人も大きく躍進できるチャンスになると思います。私はまだ海外に行ったことがないですが、自分の視野を広げるのに必ず役に立つと思うので、いつか留学などチャンスがあれば挑戦してみようと思います。

○サッカーをプレーするには英語は必要ないと思ってた。しかし、決して「必要ない」ことではないと知ったきっかけがあった。国際大会では日本語が通じないことが多く、世界共通語である英語を使って審判とのコミュニケーションを取らなければならない。それを知るきっかけとなった場面は、私が動画で見ていた2004年に中国で行われたアジア大会のドキュメント番組である。ある試合で日本はPK戦までもつれ込んだ。トーナメント方式だったため、負ければ敗退という状況で1、2番目の選手が外してしまった。しかし、その原因は芝がずれて踏み込めないということだった。当時、キャプテンだったMさんは審判に詰め寄って英語で場所を変えてくれるように説得した。その結果、場所を変えてPKを行うことになり試合は勝つことができた。あの時英語で説得できていなかったら日本は負けていた

し、その時初めてサッカーでは英語が必要なんだと考えた瞬間だった。また、サッカーにはプレー以外のところでも英語を使わなければならない。それはFIFAで会議や抽選会が行われた時だ。会議や抽選会は色々な国が集まって行く。その時自国語で話しても話しの内容がわからない。そのためFIFAでは英語を共通語として会議や抽選会では英語で話すことになっている。そのため英語はサッカーの仕事には必要なのだ。本科目を受講して英語に対して取り組む姿勢が変わったと思う。私は将来教師になることが夢である。私は教師になる時に英語を話せるようにしたいと思っている。生徒に外国人が在学している時、英語を話せる人がいなければ不安になることがあると思う。その生徒のためにも英語を話せるようにしたい。また、保健・体育の授業は受験には出ない。そのため生徒の受験の手助けになれるように、英語を教えられるようにしようと思う。ただ、どのような勉強をしたらいいのかわからなかった。この講義を受けて勉強の仕方やどのような能力が必要なのかわかり、勉強に対する意欲が高まった。なので、モチベーションを高く保って理想の教師に近づけるようになっていきたい。

- 先生やトレーナーさんたちの留学経験を通して感じたことや自分自身の変化などのお話を聞いて、留学という経験はとても価値のあるものだということを理解した。留学すると、できなくても英語を使って生活せざるを得ないから、苦戦しながらも最終的には英語を身に着けることができたのだろう、とお話を聞いていて感じた。また、この授業を受講したことによって、スポーツに関する研究の内容や論文などを読むには英語を理解することが重要であり、英語を習得することは自分の学びをより充実したものにしてくれるということに気づくことができた。この講義でたくさんの先生やトレーナーさんのお話を聞いていて気付いたが、どの人も向上心があって意志の強い人たちで夢を実現するために努力を続けていた。好奇心があり、人からのアドバ

イスを大切に自分で考え行動していた。これは、英語を習得することだけでなく人生においても重要なことであると感じた。これからは私も自分の将来のために大学の授業や英語の学習を向上心や好奇心を持って自分で考え頑張っていきたい。

② 2017年度 体育学科 英語力確認テスト最下位得点層から

- 海外サッカーに関係する職業に就いてみたい。そのためには英語が絶対に必要だが、私の英語のレベルは中学生と同じくらいだ、それは中学生の頃に、日本語が分かれば英語は必要ないと勉強せずに来たからである。そのときは海外に全く興味がなかったし、英語を勉強するのも面倒くさかった。今では、なぜ勉強しなかったのかと後悔している。「スポーツと英語」を受講した理由は、もちろん海外に興味があったからで、もっと海外のことについて知りたいと思ったから受講させていただいた。受講する前は、欧州サッカー関係しか興味がなかったが、講義で色々な先生の話を知っているうちに、他の国々のことについても興味が湧いてきて、特にアメリカには一度行ってみたいと感じた。先生たちはみんな留学を経験していて、自分もどこかに留学してみたいと思うようになった。留学するならイギリスにしてみたい。この講義を受講してから英語科目への取り組みは積極的になったと感じる。今までだったら、分からない単語があっても分からないままにしていたが、今はしっかりと調べるようになった。英語はとても難しいが、話せるようになるために一生懸命勉強したい。

- 「スポーツと英語」という授業を受けてみて、私はスポーツと英語の強い関係性を学びました。私は以前まで英語は1番苦手な科目で将来も使うことがないと考えていました。しかし今回、スポーツにおける英語の大切さを学んでからは、基本的な会話はできるようにならなければいけないと感じました。授業

をしてくださった先生方から、海外への留学経験や海外で働かれていた時の体験談を聞いて、その話を通じて海外とはどういうものなのかイメージすることができて身近に感じることができました。母国語として英語を使っていない国と関係を持つとした時にも英語は必要だということも学びました。世界共通語である英語を学ぶ国は多いですが、日本語を学ぶ国は少ないです。海外でコミュニケーションを取るために英語は欠かせないということを学びました。これまでの授業の話をもとに、これから自分に必要になってくる英語の知識を養っていけるよう、**英語の学習に取り組んでいこうと思います。**

○2020年のオリンピックに野球が選ばれた。そのことにより日本にもたくさんの外国人が訪れることになる。日本がグローバル化していく中でさらに日本の中に英語が溢れかえってくるであろう。なおさらスポーツに英語が絡んでいくであろう。そのため、これからスポーツを教える中で英語も教えることが出来たら良いのではないだろうか。私はこの授業を受講したことにより、英語に関する考えが大きく変わり、英語はとても必要になってくるものだと考えるようになった。まず、英語ができることにより英語ができる人にしかできない仕事もあり自分自身の可能性が大きく広がることが分かった。また、昔はずっと日本の中で生きていくから英語なんかいらないと考えていたが、日本で生きるだけでも十分英語が必要な世の中になってきていることを知れたことにより、この科目を受講して正解だったと感じた。

○私は大学卒業後、東京のナイキショップで働きたいという、夢を持っている。そのために、実際に店員さんを見に行ってきた。そこにいた店員さんは、日本語、英語、中国語、韓国語を使い分ける方々ばかりで、自分じゃ足元にも及ばないと、思い知らされて帰ってきた。やはり、自分には努力が足りないということ、深く考えさせられる経験だった。今

の時代、スポーツをするにも、スポーツ選手を支えるにも、スポーツ関係の仕事につくにも、どこでも英語という課題が降りかかってくる。あとあと後悔するならば、この大学4年間を使い、少しでも英語を覚え、自分の夢に一步でも近づきたいと考えた。この科目を受講して、講義の先生方の話を聞いても、自ら海外留学をして、本場で英語の勉強をしているなど、本当に驚くような話ばかりで、その中でも納得させられた内容は、「日本語の資料より、英語の資料のほうが、倍以上あり、英語を覚えることで、頭に入る知識が日本語の倍以上」ということだ。この話を聞いて、私の英語に対する考え方が変わった。私も英語を理解し、自分で考えられるまで、英語の実力をつけ、スポーツ選手、サポーター、トレーナー、スポーツ関係の仕事など、将来の幅を増やせるように努力していく。

③ 2017年度 体育学科以外 (履修者が少ないことから各学科別に抽出)

○初めに、スポーツには、なぜ英語が必要なのか。以前の自分は、スポーツと英語というのは別々の分野であり、言語と一つの活動の関係でしかないと考えていた。しかし、この講義を15回受講してみて、スポーツに英語は必要不可欠なものと感じた。その理由として、英語を学ぶことにより海外の文化や考え方を学ぶことができ、その学んだことを現在の部活動に活かすことができるという点である。日本の文化は、よく言えば謙虚で礼儀正しい文化だが、悪く言えば受け身で積極性がない文化ともいえる。しかし、海外の国々の文化の多くは主体性があり、自分で判断して行動するような文化である。自分自身の性格はどちらかといえば日本人寄りの性格で、物事に対して受け身で対応してしまうことが多い。しかし、英語を学ぶことにより日本のような「待つ文化」ではなく、海外の「挑戦する文化」のノウハウを身につけることができる。自分は、現在トライアスロン部に所属している中で毎日挑戦の連続である。一見無関

係に思われる英語とスポーツだが、英語を学んでいくことにより自分の性格の面においてプラスに働き、最終的には結果にもつながっていきと考えている。次に、この科目を受講したことによる英語科目の取り組み姿勢についてだが、自分自身、英語を勉強することは好きでアルバイトも塾の講師で英語を教えている。しかし、今まで書く英語は勉強してきても実践で使えるような話す英語、聞く英語は身につけられていなかった。この科目を受講してみて印象的だったのは、実際に必要となってくるのは英語でのコミュニケーション力であり、書く英語は後からでも間に合うというものだった。そこでどうすれば話す、聞く英語を身につけることができるのかと考えたときに、先生たちが行っていた留学も考えたが金銭的に難しい状況だったため、一番手軽に取り組めるトイックの勉強を始めることにした。トイックで英語を学ぶことができれば前段落で書いたように海外の文化に触れることができ、さらに点数を取ることができれば三年後の教員採用試験でおおきな武器になると思う。そんな単純な話でもないと思うが、行動してみなければ変わらないし、これもひとつの挑戦であると考えている。最後に、さまざまなスポーツと英語についての価値観を持った先生たちの講義を受講し、自分自身もスポーツと英語についての考え方が大きく変化したと感じている。今の考え方を忘れずに、これからの三年間、スポーツと関わり合いながら英語を学んでいきたい。

○この授業において私の英語に対する意欲は上がったと感じる。もともと英語は得意ではなく、むしろ苦手な科目の一つだ。そんな英語をやはり学ぶべきなんだと考えさせられる授業だった。自分の将来に英語が関わるかは、正直まだよくわからない。だが、もう少しすれば、英語を使えて普通という時代も来ってしまうかもしれない。ましてや職場で英語が公用語という会社も日本にも存在している。英語はスポーツにおいても普段の生活においても必要だということを感じさせられた。

そこまで堪能に話せるというレベルに行き着かなくとも、コミュニケーションはしっかりと取れるようにしたい。

○私は、この「スポーツと英語」の授業を受講して英語についての考え方が変わり、取り組み方も変えたいと思った。これまでも英語の勉強はしてきたが、それはあくまで学校の授業で必要なことや、検定、そして大学受験のためのものでしかなかった。しかし、体育学部に入學し海外のスポーツのレベルの高さに肌で触れることができたお陰で、海外の国のスポーツ事情にも触れてみたいと強く思うようになった。現在も英語の授業を受講しているが、その授業だけではまだまだ足りないと私は思っている。学校での学びも大切だとは思いますが、やはり、なにより重要なのは実際に英語に触れることだと思う。これまでに何度か海外に行ったことがあるが、学校で習う英語と本場の英語には異なる部分が多々あった。日本で習うフレーズで海外の人と会話しても通じないということがあった。そんな経験から、授業だけにとどまらず実際に海外に足を運んで経験を積まなければいけないと思った。この仙台大学には、海外への留学制度が存在しているので、積極的にその制度を活用し自らの教養を深めていきたい。

④ 2018年度 体育学科 英語力確認テスト最上位得点層から

○平成19年9月1日時点で日本語指導が必要な外国人児童生徒が在籍する公立学校は5877校あり、「前回調査より増加した」との記載から、これからも学校には日本語を話せない生徒が増えてくると予想される。仙台大学で講義を受けている留学生と同じように、日本語をいつでも訳せる人が付くとは考えられない。せめて体育の時間だけでも言語の壁をなくしたいと考えるため、英語を用いてのコミュニケーション能力は必要だと考える。各講義で留学経験者の経歴などを聞いてきたが、それぞれ口を揃えて言うのは「英語

の能力を持っておいて損はない」と「海外から日本を見ることで今までの考え方が変わってくる」ということだ。日本だけで人生を過ごすのではなく、様々な文化や考えを体験し、知見を広げることで人生を豊かにできるだろう。体育に英語は関係ないと考えるのではなく、自身から積極的に関わっていくことで急に英語が必要になった時でも対応できるようになる。英語を「体育には関係のないもの」として忌避するのではなく、自分の人生の糧として貪欲に学んでいけるような考えで、これからの**英語学習に精を出していきたい**。そのうち英語だけでなく中国語やドイツ語など他の言語も学んでいきたい。

○砲丸投げや様々な陸上競技で発展しているのはアメリカやヨーロッパだ。投擲競技を私自身で取り組んでいて感じるがあります。それは知識の欠如だ。日本の投擲を行っている学生アスリート、学校のコーチ、顧問など、選手から教える立場の人まで投擲の動作やどうやったら投擲物が飛ぶのかという理論に関しての知識に乏しいといえる。この現状を打開するために必要なのが英語なのだ。投擲や陸上全般が発展しているアメリカなどの英語圏の陸上に関する論文や著書を読み、英語圏の本場のコーチと陸上について話す場面に英語は必ず必要である。学生アスリートは強くなろうとしているときに努力をするだろう、だが強くなろうとするときに英語は勉強しない。英語を勉強するという行為は、直接、私たち学生アスリートを強くはしないが、英語によって持たられる知識は私たちが強くなろうとする行為にとって近道であり、強くなるため私たちがよく行っているトレーニングと同じくらい良い影響を及ぼす。英語を学ぶことは意外に大切なことなのだ。「スポーツと英語」という講義を受け、英語の必要性の幅が私の中で広がった。英語を学ぶことによって得られる情報、知識が私たちをより進化させてくれるのだ。高校までは私たちのほとんどは、ただの教科としてしか英語を見てこなかっただろう。英語を学ぶことによ

て得られるものなど、なにも興味を向けずにいた、これまでもただ受験に使うからというあまり意味のない理由で勉強していた。だが、英語の必要性、魅力に気付いた今、自分の向上のために**英語を勉強し、英語を使えるようになる**と決意した。これからの長い人生をより良いものにしてくれる、よい影響を与えてくれる英語というツールを、もっと皆は見直すべきなのだ。グローバル社会になった現代では英語が基礎教養になりつつある。大人として、英語を身に着けることで社会に出たときに便利だ、それに自分のためにもなる。世界とつながることのできるツール「英語」を学ばなければもったいない。英語を学校の「教科」としてだけでなく「万能ツール」として身に着けると考えて取り組むべきなのだ。そうすることで、より自分の向上に役立つだろう。

○私自身もともと英語は得意な教科だった。センター試験でも英語は平均を上回っていた。しかし得意なだけであり、英語が話せたらいいな、とは思ったこともなかった。しかし、この授業を通して、私の英語に対する考え方は変わった。英語が話せるだけで様々なことができ、知識も得られると知ったとき、私は少しでもいいから英語が使えるようになろうと決意した。全体を通して、英語の必要性について見出すことができ、自分自身の英語に対する取り組み方の姿勢も良い方向に傾き、この授業を受講することができて良かったと感じた。

○「スポーツと英語」の授業を受け、英語を話すことを目的として学ぶよりも別の目的のために、ツールとして英語を身に着けようとする先生方が多くいらっしゃった。この事実には私は非常に驚き、自分自身はどうなのかと考えることができた。改めて自分が目標とする仕事で英語がどのように役立つかを考えることで、英語を学ぶための目的ができ、学習意欲がわくようになった。大学の授業では、**総合英語Aでは英会話を含め、実際に英語が不自由なく使うにはどのようにすればよいか**を考える

ことができた。「スポーツと英語」の授業では、海外での体験を先生方から聞くことができ、より具体的に英語の学び方をまなぶことができた。そして、私が英語を学ぶ目的を確認することができた。

⑤ 2018年度 体育学科
英語力確認テスト最下位得点層から

○この授業をきっかけに、必要性の自覚に準ずる形にはなったが、純粹に英語でのコミュニケーションについて興味が湧いた。英語で会話ができるようになることで、コミュニティーが広がるのは明らかであるから、そういった英語による自身の可能性の拡張に積極的でありたいと感じた。具体的には、英語を耳に慣れさせるように、日常的に英語に触れられるよう、身近で自分も楽しめる、海外ドラマや洋画を見る習慣をつけようと思ったし、さらに英語の勉学に励もうと思った。

○私は「スポーツと英語」という科目を受講して、英語を学ぶことで多くの力を身につけることができると知りました。とくに私は、表現力を身につけるためにもっと英語を勉強しようと思いました。私はあまり表現力がありません。そのため英語という、断片的で、自分を表現しやすい言語を学ぶことで、表現力を高めたいと思いました。またそれだけでなく、視野を広げるために英語を学ぼうと思いました。日本語での検索数より、英語での検索数の方が多く、情報量は圧倒的に英語が多いです。より多くの情報や、最新の情報を得ることができれば、今よりもっと視野が広がると思います。そのため今から、英語の歌を聴いたり、海外映画を見たりなど、少しずつでもいいので、大学卒業までには、英語でコミュニケーションをとることが出来るように努力していきたいと思いました。また、2020年には東京オリンピックが開催されます。そのため多くの観客や、選手が世界各国から日本を訪れると思います。そんな時、英語を喋れず恥ずかしい思いをしたくありません。

東京オリンピックまでに英語でコミュニケーションをとるまでは、正直、厳しいと思います。そこで、話そうと頑張るのではなく、まずは単語をしっかり覚えて、相手の英語を聴き取れるようにしたいと思います。そうすることで、英語でコミュニケーションをとるまではできなくても、英語で話しかけられても、最低限のことはできると思います。

○海外で活躍する陸上競技短距離の選手たちが、日本国内の試合と海外の試合の違いを述べている記事があり、興味が湧いて読んでみました。海外の試合となると、さまざまな国から選手が来るため、全く知らない海外の選手と二人から三人くらいがまとまって同じ部屋になり、英語が話せないと全く不便とのこと。相手が寝る時間、起きる時間、宿舎のご飯の時間等を聞きたくても、英語が話せなければ全くコミュニケーションが取れず、とても不便だと感じると述べていた。余談だが、そういう時には果物を持ってきたり、日本から持ってきたお菓子をあげたりとって仲良くなる方法もあるとのこと。このようなことから、日常的にはもちろん、スポーツに取り組む上でも英語はとても重要なツールということが知れた。

英語科目の取り組みの姿勢の変化についてだが、まずは今ある講義の、総合英語に力を入れて取り組んでみることにした。体育大学ということもあり、海外のスポーツニュースを英語で読んだりといった内容なので、そこで海外のスポーツ事情を勉強しながら英語の理解力も深めていこうと考えている。そうして意識していることで、以前よりも早いスピードで英語力が上がってきており、英語の楽しさも感じる事ができている。

⑥ 2018年度 体育学科以外
英語力確認テスト最上位得点層から
各学科別に抽出

○学連で活動している上で、加盟校に留学生がいたり、全国大会には選手はもちろんのこと、

関係者・観客等が海外からいらしてました。その中で、会話の中心はやはり英語でした。主催側である私達が英語を理解し、活用していかなければ選手を含め、多くの人々に多大な迷惑がかかるのだと思いました。そして、私達が英語を話せるようになるのはもちろんのこと、情報社会である現代だからこそ、情報媒体などを使ってうまく英語で情報を発信できれば、選手全員が気持ちよく競技できると思いました。そして、見ている関係者や観客も楽しい気持ちで応援していただけるのだと思いました。今回、本科目を受講し、今まで以上に英語を勉強しなければならないという危機感を覚えたのと同時に、英語が話せて、なおかつコミュニケーションのツールとして活用できれば、世界各国の人々と気持ちを共有できるのだと感じました。各先生方の講義を聞いて、多くの先生が八村塁選手の話を取り上げていました。学園系列の卒業生として英語をフル活用して海外に挑む姿はとても尊敬します。一方、一番心に残った講義は“The Cave”というアメリカの映画を観た講義です。この映画は日本で公開を中止されたというものです。正直な感想としては、私達が住んでいるこの日本で起きていることなのに、素直に受け入れられずにとっても怖いなと思いました。先生もおっしゃっていたように、日本を知るためには外から見るべきだという言葉に、心を打たれました。仙台大学は体育大学であるにも関わらず英語科目がとても少ないなと思いました。トップアスリートを育成するためには、実技一本だけではなく、これからの社会では英語も話せるような人材が求められています。そのためには、学校外で自らが進んで英語を勉強し、身に着けて、外から日本を見ることができるよう人間になりたいです。

○私は大学三年生時にアメリカへのクライミング留学を考えており、英語は必須のツールとなる。つまり近い将来、否が応でも英語を話せるようにならなければいけない。ボルダリングの聖地と言われるようなところでクライミングを学び、競技力を向上させるためにも

英語は必要である。本科目を受講したことにより、私はより英語への興味が湧き、以前より抵抗なく英語に触れることができています。以前までは英語を「やらざるを得ない科目」という意識があり、高校時代の受験勉強の延長線として考えていた。よって、勉強への抵抗感があり、英語に対して消極的だった。しかし、本科目の内容が「英語はあくまでツール」であるということがしばしば言われており、海外での大学生活やインターンがどのような価値があるか、留学に必要な知識やビザ、留学の入門的な知識を学ぶことができた。よって、海外へ憧れがより高まり、それに伴って英語もただのツールであって、それも使いこなすことができれば世界共通言語であるから多くの人々とかかわることができる。そう思うと総合英語Aやパソコンによる英語も積極的に取り組むことができた。具体的に言うと、英単語を夜寝る前に取り組み、英語の演説のCDなどを聞いて耳を英語に慣らすようにしている。海外の映画を英語で英語の字幕で見たりすると時間はかかるが発音や言い回しが学べる。まだ、多くの時間を英語に割くことができてはいないが、地道に英語を学び、留学が現実のものになるように努めたい。本科目を受講したことにより、英語科目への取り組みは消極的な姿勢から積極的な姿勢へと変化することができた。

○この授業で様々な経験を持つ先生方の話を聞いて、英語の重要性が今まで思ってたよりも、大分、重要なことだと気づいた。英語の勉強方法として、まずは自分の英語力を知って、まずは英単語を覚えることが大切だと分かった。そして、海外のドラマや映画を見たり、英語の曲を聴いて歌詞を理解したりすることでも英語力に繋がることも分かった。特に印象に残ったことが、世界の人口が約70億人に対し、英語を話す人口は、約17.5億人いて、その内、約13.6億人は第二言語で英語を取得しているということに驚いた。そして、日本でも文部科学省が2050年頃には我が国での多文化・多様化・多民族になることを予想して

いることも非常に驚いた。これによって、プロスポーツ選手になって海外で活躍するためだけに必要だと思っていた英語が、日本でも会社での様々な場面で英語が必要になってくることになる。この話を聞いて、あまり必要ないとは思っていた英語も、もうそんな時代ではなくなってくるのだと感じた。私は、後期に大学で初めて英語の授業を受けて、毎回予習もせずに受けていて、授業で出された問題も分からないことが多くて、その上に終わった後にその問題も復習せずにそのままにしていた。二年生からの英語の授業は、しっかり予習して臨み、授業が終わった後の問題の復習もしっかりやりたい。

○私は将来、中学校の体育教師になりたいと考えている。専門競技は剣道だ。私は正直、剣道に英語が必要なのかと思っていた。だが、この「スポーツと英語」の講義を受け、そのイメージが変わった。よくよく考えてみれば、剣道は最早日本だけのスポーツではないからだ。剣道は今や世界中で楽しまれているスポーツのひとつなのだ。だが果たして体育の教員という職に就きながら外国人と接する機会があるのだろうか。私はまたそこで悩み考えた。そして、高校時代のある行事を思い出したのだ。私の出身校はアメリカのミネソタ州ととても深い交流がある。ミネソタ州ウィノナ市だ。在校生をウィノナに迎え入れホームステイや様々な体験をさせてもらえる。逆にウィノナの方をこちらに迎え入れて日本の文化を教える。そこで、剣道の体験会があるのだ。剣道場にウィノナの方を招き、試合や基本打ちを披露する。また実際に竹刀を握って貰ったり、部員に対して技を打ち込んで貰ったりする。その際に英語が必要なのだ。いくら交流が深いからと言って、日本語をスラスラ話せる訳でもない。はたまた日本語を聞き取る能力もさほど高くはない。そこで英語を使って説明するのだ。カタコトの英語を懸命に話し、どうにかして伝える。今思えば本当に伝わっていたのか知る由もない。だが、少なくとも英語を話す必要があったの

だ。「スポーツに、何故、英語が必要か」、その答えは、「グローバル化が進みつつある世界で、スポーツも共にグローバル化が進んでいるから。」、だと思う。この講義を受けて、英語の必要性を再認識できた。受講して本当に良かったと思う。

⑦ 2018年度 体育学科以外

英語力確認テスト最下位得点層から

(体育学科以外の学科での英語力確認テスト低得点者は、感想文の提出も低調であったので、1例のみの適示となった)

○私は部活動では剣道をしており、正直、剣道に英語は必要ないと思う。理由はアメリカではあまり剣道をする人が少なく、ごくわずかな人しかやっていない。どちらかと言えば韓国の方が日本のように剣道をする人が多く、剣道の発祥地と言われるくらい、やる人はとても多く、三年に一度開かれる世界大会では、いつも決勝戦で韓国と当たり、お互いにライバル視するほどの関係でもある。剣道の場合は英語より韓国語を習った方が良いのではないかと個人的に思う。それは、今の韓国の剣道が日本と同じくらいの強さであり、どのようなことをしたら強くなれるのか聞いたりし、交流を大切にされた方が良いと思う。確かに剣道の場合、英語は必要ないと思うが、剣道をしている人のほとんどが警察官や警備員などの人の安心、安全を守る仕事に就く人が多いため、世界共通語である英語を覚えていた方が役に立つことが多い。例えば、来年開催される東京五輪では世界からたくさんの方が日本を訪れる。その際に、海外の人に、道を尋ねられたり、質問をされることもあるかもしれない。その時、英語が話せなかった場合、相手が困ってしまうということもあるので話せるようにしていた方が良いと思う。私が「スポーツと英語」を受講して感じたことは、もっと英語がうまくなりたいと感じたことです。この授業では、度々、明成高校出身の八村選手を取り上げることが多く、八村選手のように夢のために努力をし、苦手な英語を話せる

ようになった姿を見て、「人は努力をすれば苦手なこともできるようになる」と思い、授業への取り組む姿勢が少しずつ変わってきたと思うことがあります。例えば、座席指定がされていない講義では、友達と固まり後ろの席で講義を受ける人は多いと思うが、私の場合、人より勉強が苦手なので座席指定がない講義では、前の席に座り講義を受けるということが多くなったと思う。また、前に座ることで、字が見やすく、先生の話の内容が自分の頭と耳に残りやすく、友達にわからないところを聞くことがなくなったと思います。この授業を受講し、色々な先生方の英語に関わる話を聞くことができ、自分も先生方のように、たくさん挑戦してみたいと思いました。自分は学生生活があと三年あるので、今の自分よりも勉強ができるように頑張りたいと思います。そして八村選手のように努力をし、苦手なものでも挑戦する気持ちを忘れないようにしたいです。

以上、代表的な「声」を掲記した。統計的な処理に基づく整理は現時点では行っていないが、履修学生の「声」から、新しい英語教育体系下における科目の設定意図は、ある程度、学生に受け入れられていることが推測できる。

傾向的に、体育学科と体育学科以外の学科との間に大きな相違は見られなかった。英語力確認テストの得点レベル間でも異同はあまりなく、最下位得点層においても、英語に嫌悪感を示すような「声」は聞かれない。同世代の英語学習における「八村 塁効果」の影響を看取することができたことは、刮目に値する。時系列的には、第1期生より第2期生に、総合英語に対する取組みについて、やや明確な意欲が示されており、科目設定意図が、年次を追って、反映してきていると考えられる（該当記載部分を強調文字で示した）。

2. 選択科目「スポーツと英語」の概要

(1) シラバスと授業計画

シラバスにおいて、本科目の一般目標を「スポーツ科学を専攻する学生にとって、如何に英語が必要なものかを知覚させることにより、大学教育として必修科目に位置付けられている英語教育課目への学生の取り組みを真摯化すること」とした。また、到達目標を次の通りとした。

- ・ 認知的領域
「各講義担当者の英語に係わる体験談の聴講を通じ、自己が目標としているスポーツ分野とのかかわりにおける英語の必要性を、具体的な適応場面の知識として理解させる」
- ・ 情意的領域
「英語という国際的共通言語が、各国の固有言語の相違というものを乗り越えて、スポーツ面で国際的連携をもたらしていることを理解させる」
- ・ 技能表現的領域
「ルールとして用いられている共通の英単語が、スポーツ種目の違いによって、様々な用いられ方をしていることを知覚させることにより、自己が目標としているスポーツ分野での英語の用い方の幅を広げさせる」

授業は、海外留学経験保有、海外勤務経験保有の日本人教員、および英語を母国語とする外国人教員が担当し、各担当者は、概ね各1回、自己の英語圏経験の披歴をベースにした英語習得の必要性について教育することとした。授業計画は、計15回の授業について、次の構成とした。

- ・ 初回オリエンテーション、各教員の経験談を踏まえた講義を9回程度、外国人教員による講義を3回程度、英会話を1回程度、まとめ・レポート作成を1回

(2) 学生の履修方法と評価

受講にあたり、学生に対し、取り組むべきこ

ととして、以下のことをオリエンテーション時に示した。

- ・ポータルサイト（ITを介した連絡通信網）から講義ノートを印刷する
- ・ポータルサイトで予習課題を確認し、講義ノート上段へ解答する
- ・予習課題解決にあたり使用した資料などを印刷・複写する
- ・ポータルサイトから講義スライドを印刷し、講義に持参する
- ・講義へ積極的に参加し、講義ノート下段にノートを取る
- ・講義ノート、講義スライド、その他資料をポートフォリオにファイルする

成績はポートフォリオ40%、レポート60%で評価した。ポートフォリオの評価方法は、「ファイルされるべきものがファイルされ、記入されるべきものが記入されているか」とした。ポートフォリオに最低限ファイルされるべきものは、講義ノートと講義スライドであり、これらのうちファイルされていないものがあれば減点とした。一方、予習課題解決のために使用した資料がファイルされていた場合は加点した。講

義ノートについては、予習課題を実施していない、あるいはノートの記載が不十分なものは減点した。ポートフォリオは第16回目の講義に回収し、関係者間で評価した。

レポート課題は次の2点とした。

- (i) 自分がかかわっている（あるいは将来かかわりたい）スポーツ分野における英語の必要性
- (ii) 本科目を受講したことによる英語科目への取り組み姿勢の変化について

(i) は、主に本科目の認知的領域目標「自己が目標としているスポーツ分野とのかかわりにおける英語の必要性を、具体的な適用場面の知識として理解することができる」の到達度を評価するものであり、(ii) は本科目の目的「英語教科科目への取り組みを真摯化」が達成できたか否かを判断するものである。

(3) 授業担当者

実施初年度の授業担当者の英語圏あるいはスポーツ経験は、概要、次の通りである。

区分	時期	学歴・職歴	備考
Native	USA・スタンフォード大学		プロ球団GM他スポーツマネジメント 野球・アマト
	NZ・オークランド大学		ALT高校教員 ラグビー
	USA・ワシントン州立大学		ALT教員 バスケ・サッカー・野球(NCAA)
海外勤務歴保有者	1986～1989 在米大使館 2006～2009 FAO本部戦略企画部		
	1987～1990全国紙アメリカ総局員 1998～2002同アメリカ総局長		
	1996～2000 民放ロスアンゼルス支局長(FNN特派員)		
英語圏海外大学卒業・修了者	2000～2003	アラバマ大学	NATAATC 体操
	2002～2009	オーガスタ州立大(院)	NATAATC バレー・バスケ・チアソフト(NCAA) バスケ(Bリーグ)
	2000～2006	インディアナ州立大(院)	NATAATC サッカー(NCAA) 男子バスケ(国内私立高校)
	2000～2010	モンタナ州立大・ポートランド州立大(院)	NATAATC 女子バレー・レスリング・女子バスケ・野球(NCAA)
	2006～2010	ハワイ州立大(院)	NATAATC 女子陸上競技(NCAA)
	2002～2011	カリフォルニア州立大サクラメント	NSCACSCS MLB NCAA バスケ(Bリーグ)
	2008～2013	ハワイ→モンタナ→ブリッジウォーター大(院)	NATAATC NFL Sports Medicine
	2010～2015	リンデンウッド大・ルイビル大(院)	NSCACSCS NCAA MLS
2009～2014	サウスイーストミズーリ大	NSCACSCS NCAA	

各担当者の授業概要は、次の通りであった。

① 英語圏海外大学卒業（修了）者

区分に用いた職業名称は、それぞれ次の略称である。

NATA-ATC : National Athletic Trainers Association
- Athletic trainer certified

NSCA-CSCS : National Strength & Conditioning
Association - Certified Strength &
Conditioning Specialist

○ NATA-ATC

- ・自己紹介：幼い頃から海外文化、特に映画、音楽に興味があったことなど
- ・留学までの経緯：就職へ有利とするため語学留学が始まりであったことなど
- ・実際に渡米して感じたこと：異文化の影響、自分の変化など感じたことなど
- ・アスレティックトレーニングとの出会い：視野を広げたことにより自分らしい、やりたいことに出会えた喜び、勉強中の苦悩や楽しみなど
- ・10年間の海外生活で得たもの：短期大学、大学、インターンシップ、大学院、就職などで経験した様々な出来事、帰国を決めた理由など
- ・日本での経歴：就職活動をどのようにしたか、どこを目標にしていたかなど
- ・何故英語が必要か、今感じること：英語を話せるようになることで感じた自分の変化について、現在の自分と当時の自分を考えて感じる英語ができることの影響など

○ NATA-ATC

- ・NFLで働いた際の経験を軸に、アメリカのスポーツ文化を象徴するNFLの概要やドラフト会議のシステムなど、日本人にはあまりなじみのない事柄を中心に、英語が話せるようになれば、こういった世界に足を踏み入れることも決して難しくないことを知ってもらう

○ NATA-ATC

- ・仙台大学の卒業生として、自身が取り組んで成果を感じた英語勉強方法を説明、卒業生という立場を利用することで、留学をより身近に感じさせる

- ・スライドは英語を使用、写真や動画を交えて留学のイメージが湧きやすいように紹介

○ NATA-ATC

- ・仙台大学の学生は、最初から英語に抵抗を持っている学生が多い。高校卒業までに英語の“点数”が悪かったということで、すでに苦手意識を持ってしまっているからである。この授業の中で、英語を話せるようになることでどれだけのメリットがあるのか、これまでの指導経験を踏まえて、英語でコミュニケーションを取ることには本気で興味と関心を持つことができれば、誰でもその目標は達成できることを訴える

○ NATA-ATC

- ・自己の経験を紹介、
 - ・留学地と大学の紹介、
 - ・体操競技における英語の必要性、
- ・スポーツ科学研究と英語、
 - ・学生が英語を学ばなければならない理由、
- ・おすすめの勉強法

○ NSCA-CSCS

- ・自身の生い立ちも含めたS&Cコーチとしての歩みを時期ごとに振り返り、それぞれの段階で得た語学やコミュニケーションに関する気づきや実体験を紹介・解説
- ・スポーツにおける英語の必要性
必要な経験を得る場に行きつくため、自身の職務を高いレベルで全うするため、自身の職域における学術的理論を確立するため

○ NSCA-CSCS

- ・自身の留学経験の紹介、
 - ・スポーツにおける英語の必要性、
 - ・英語勉強法、
 - ・留学費用

○ NSCA-CSCS

- ・留学のきっかけ→TOEFL受験と留学準備→大学留学→インターン①→大学院→インターン②→総括
- ・英語の必要性、
 - ・最新の情報とテクノロジー、
 - ・日本とは規模の異なる環境、
- ・指導対象

② 海外勤務歴保有者

- 行政関係（海外勤務）
 - ・「経済とスポーツ」で学生が特に留意すべきこと、
 - ・大学留学経験、
 - ・国際勤務経験をもとに英語が得意であると国際社会で得すること
- マスコミ関係（海外駐在）
 - ・自己の英語体験、
 - ・英語はコミュニケーションの道具だけでないこと、
 - ・“try out”はチャレンジ精神の典型
- マスコミ関係（海外駐在）
 - ・データをもとに、英語が世界共通語であることを理解させる、
 - ・実は英語は難しい
 - ・薦める学習方法、
 - ・特派員生活&LAに暮らして初めてわかったこと
 - ・英語の歌から英語に慣れ親しむ

③ 英語圏外国人教員

- 米国
 - ・これからの世界に英語がいかに重要かという事を理解させるために、参考例をあげ、映像等を使い学生に説明（国連の例、オリンピックの例、FIFAの例）
- NZ

Overview: The strong message of “English as a universal language of communication,” in any environment is emphasized through the use of visual media and the topic of “Racism in Sports,” to highlight the above importance of English communication for deeper understanding.

○ 米国

- ・スポーツ界のアパレルメーカーである「ビッグフォー」、ナイキ、アディダス、リーボック、アンダーアーマーが市場で主にシェアをリードしており、こうしたスポーツブランドに欠かせないのが、ブランディングスローガンと過去と現役のスーパーアスリートのコラボレーションであること
- ・スーパーアスリートが残したインパクトのあるスローガンやそのスローガンの戦略など「ビッグフォー」の狙い

3. 「スポーツと英語」履修者の必修科目「総合英語」履修状況

前提として、履修状況の把握を簡便化するため、選択科目「スポーツと英語」単位習得者の必修科目「総合英語」群の履修状況について、次の方式により「総合英語」群の成績評価を数値換算して整理した。

「総合英語」評価区分	秀	優	良	可	不可・放棄
数値換算	4点	3点	2点	1点	0点

① 「スポーツと英語」単位習得者の全体状況

表1は、第1期生の「スポーツと英語」単位取得者の学科別対象人数、英語力確認テストの得点状況、「総合英語A」から「総合英語D」までの評価の平均値の推移、表2は、第2期生についての同様の状況、および第1期生との状況の相違を比較したものである。

表1 2017年入学「スポーツに何故英語が必要か」履修状況（総合英語A～D）

単位取得者	対象人数		PT得点	総合英語の評価(平均値)				
	人数	構成比		総合A	総合B	総合C	総合D	A+B+C+D
計	112	100.0	55.5	2.62	2.13	2.51	1.95	1.70
体育学科	95	84.8	54.0	2.61	2.14	2.59	2.04	1.71
その他の学科	17	15.2	64.1	2.71	2.06	2.06	1.41	1.69

PT：プレイズメント・テスト

表2 「スポーツに何故英語が必要か」履修者状況（2か年比較）

2017 単位取得者	対象人数		PT 平均得点	総合英語の評価(平均値)		
	人数	構成比		総合A	総合B	A+B
計	112	100.0	55.5	2.62	2.13	1.92
体育学科	95	84.8	54.0	2.61	2.14	1.91
その他の学科	17	15.2	64.1	2.71	2.06	2.03
2018 単位取得者	対象人数		PT得点	総合英語の評価		
	人数	構成比		総合A	総合B	A+B
計	248	100.0	56.5	2.82	2.31	2.52
体育学科	214	86.3	56.5	2.86	2.25	2.55
その他の学科	34	13.7	56.2	2.56	2.68	2.31

・単位取得者数と英語力確認テストの得点状況

第1期生の単位取得者は112名であったのに対し、第2期生の単位取得者は248名であり、2.2倍と大幅に増加している。前述の通り、受講者状況は、第1期生が164名、第2期生が278名であるから、単位取得者の割合は、第1期生が68.3%であったのに対し、第2期生が89.2%と、単位取得率も大幅に増加している。学科別では、体育学科の比率が高まっている。

英語力確認テストの平均得点の状況は、第1期生と第2期生とで左程の相違はないが、第1期生の体育学科以外の学科所属の単位取得者は17名と少ないこともあるが、高得点層が多い傾向となった。

・「スポーツと英語」と必修科目「総合英語」群との履修関連性

前述の通り、必修科目については、「総合英語A」から「総合英語D」という学年進行の科目設定に伴い、教育内容レベルを高めていく体系を取入れており、「総合英語A」と同時期に履修する「スポーツと英語」の単位取得者が、この体系下で、その後の学年進行で履修する「総合英語A」その他必修科目における評価がどのように推移していくかを把握することは、選択科目「スポーツと英語」と必修科目「総合英語」群との履修関連性を測る指標として、意味ある尺度となる。その結果を示したのが、表1および表2の総合英語の評価(平均値)の推移である。(i) 第1期生の必修科目の評価の推移

第1期生については、「スポーツと英語」の単位取得者が、その後の必修科目「総合英語」群の履修において、その評価の「向上あるいは維持」という推移を辿るという傾向は出なかった。むしろ、「総合英語A」から「総合英語D」にかけて、体育学科以外の学科所属の単位取得者には、評価の低下という傾向が出た。

(ii) 第2期生の評価の推移、および第1期生との比較

第2期生については、必修科目「総合英語」群2科目間のみでの推移であり履修関連性を測るまでには至らないが、第1期生同様、「総合英語A」から「総合英語B」にかけて評価低下の傾向となった。但し、34名という少人数ではあるが、体育学科以外の学科に所属する単位取得者の評価が向上している結果となっていることは、履修関連性を裏付ける兆しも年次的には現れ始めていると受け取れる可能性を示している。

・「スポーツと英語」の評価別に見た履修関連性

表3は、第1期生について、「スポーツと英語」単位取得者の同科目履修結果を評価別に層化した場合の学科別対象人数、英語力確認テストの得点状況、「総合英語A」から「総合英語D」までの評価の平均値の推移、表4-1から同4-3は、第2期生についての同様の状況、および第1期生との状況の相違を比較したものである。

対象者数としては、「秀」評価が多いこと、そのことと「総合英語」群の評価との間には関連性が見られなかったことが挙げられる程度であり、その余の分析には触れず、結果のみを示すに留める。

体育系大学における英語教育の新しい試み

表3 2017年入学「スポーツに何故英語が必要か」単位取得者 評価状況（総合英語A～D）

全体		対象人数		PT得点	総合英語の評価(平均値)				
		人数	構成比		総合A	総合B	総合C	総合D	A+B+C+D
単位 取得者	秀	41	36.6	53.8	2.73	2.22	3.15	2.32	1.61
	優	27	24.1	59.6	2.59	2.04	1.74	1.56	1.89
	良	34	30.4	55.2	2.60	2.10	2.59	2.06	1.64
	可	10	8.9	52.7	2.30	2.10	1.70	1.10	1.80

体育学科		対象人数		PT得点	総合英語の評価(平均値)				
		人数	構成比		総合A	総合B	総合C	総合D	A+B+C+D
単位 取得者	秀	40	42.1	53.8	2.78	2.25	3.20	2.35	1.63
	優	22	23.2	58.9	2.55	2.05	1.68	1.55	1.95
	良	24	25.3	51.3	2.52	2.05	2.75	2.29	1.58
	可	9	9.5	49.9	2.22	2.11	1.67	1.22	1.81

その他の学科		対象人数		PT得点	総合英語の評価(平均値)				
		人数	構成比		総合A	総合B	総合C	総合D	A+B+C+D
単位 取得者	秀	1	5.9	52.0	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
	優	5	29.4	62.6	2.80	2.00	2.00	1.60	1.63
	良	10	58.8	64.6	2.80	2.20	2.20	1.50	1.78
	可	1	5.9	78.0	3.00	2.00	2.00	0.00	1.75

表4-1 「スポーツに何故英語が必要か」単位取得者状況（評価別2か年比較）

全体		対象人数		PT 平均得点	総合英語の評価(平均値)		
2017		人数	構成比		総合A	総合B	A+B
単位 取得者	秀	41	36.6	53.8	2.73	2.22	1.80
	優	27	24.1	59.6	2.59	2.04	2.23
	良	34	30.4	55.2	2.60	2.10	1.74
	可	10	8.9	52.7	2.30	2.10	2.20

2018		対象人数		PT 平均得点	総合英語の評価(平均値)		
単位 取得者		人数	構成比		総合A	総合B	A+B
単位 取得者	秀	165	66.5	58.3	2.99	2.51	2.69
	優	52	21.0	54.4	2.63	2.10	2.37
	良	26	10.5	52.3	2.15	1.42	1.79
	可	5	2.0	37.6	2.40	2.40	2.40

表4-2 「スポーツに何故英語が必要か」単位取得者状況（評価別2か年比較）

体育学科		対象人数		PT 平均得点	総合英語の評価(平均値)		
2017		人数	構成比		総合A	総合B	A+B
単位 取得者	秀	40	42.1	53.8	2.78	2.25	1.83
	優	22	23.2	58.9	2.55	2.05	2.30
	良	24	25.3	51.3	2.52	2.05	1.58
	可	9	9.5	49.9	2.22	2.11	2.17

2018		対象人数		PT 平均得点	総合英語の評価(平均値)		
単位 取得者		人数	構成比		総合A	総合B	A+B
単位 取得者	秀	136	63.6	58.5	3.07	2.43	2.75
	優	50	23.4	54.7	2.62	2.06	2.34
	良	23	10.7	52.6	2.22	1.52	1.87
	可	5	2.3	37.6	2.40	2.40	2.40

表 4-3 「スポーツに何故英語が必要か」単位取得者状況（評価別 2 か年比較）

その他の学科							
2017		対象人数		PT得点	総合英語の評価		
		人数	構成比		総合A	総合B	A+B
単位 取得者	秀	1	5.9	52.0	1.00	1.00	1.00
	優	5	29.4	62.6	2.80	2.00	1.94
	良	10	58.8	64.6	2.80	2.20	2.13
	可	1	5.9	78.0	3.00	2.00	2.50

2018		対象人数		PT得点	総合英語の評価		
		人数	構成比		総合A	総合B	A+B
単位 取得者	秀	29	85.3	57.4	2.62	2.86	2.38
	優	2	5.9	47.5	3.00	3.00	3.00
	良	3	8.8	50.0	1.67	0.67	1.17
	可	0	0.0	0.0	0.00	0.00	0.00

4. 考 察

新しい英語教育の実施自体、体育系大学として受講する学生も「初」、教育する側も「初」、ということで、両者に戸惑いが見られるのは当然であるが、その実施自体、今後の教育効果については期待が持てるところとなっていることが、第1期生に対する必修科目履修の1サイクルが終了となったに過ぎない今回の報告時点でも、相当程度、窺えることが確認できた。同じく、効果把握の方法についても「初」、ということになり、今後、さらに様々な観点から分析を進めることができると考えている。例えば、選択科目「スポーツと英語」を分析の基準とする発想に焦点を絞ったとしても、評価の尺度について、「スポーツと英語」を履修しない学生群との比較、「スポーツと英語」の単位取得に至らなかった学生群との比較、単位取得者について、英語力確認テストの得点別（習熟度レベル別）に層化した群間の比較その他、今回の英語教育の新しい試みの成果を検証する視点は、さらに付加していかなければならない。さらに、教育内容、評価方法、英語力の確認方法、習熟度別レベル分け方法等、教育体系そのものも成果把握の切り口としての対象と考えれば、視点はさらに拡大することになる。今後、さらにデータ収集が進行した段階で、効果的な測定に資する指標を抽出し、分析を進めることにより、この新しい英語教育の深耕を図りたいと考えている。

おわりに

次は、第一報で触れたように、新しい英語教育体系の対象学生1期生が選択科目群の掉尾となる「就職のための英語」授業の履修を終了した時点で、PDCAサイクルの視点からの自己点検・評価結果を第三報として世に問う予定である。第一報と同様、最後に、本稿作成に協力頂いた「総合英語」の授業担当非常勤講師の各先生、および共同執筆者に代表として名を連ねた「スポーツと英語」主担当の山口准教授以外の同授業担当者各位に謝辞を記して、第二報を閉じる。

文献

朴澤泰治ほか(2019)「教育の質の向上」の視点からの体育系大学における英語教育の新しい試み(第一報). 仙台大学紀要, 第50巻第2号: 39-60

(2019年 5月31日受付)
(2019年 9月20日受理)